

青森県近代文学館報

特別展 詩人・一戸謙三

会期 二〇一九年七月十三日(土) ～ 九月二十三日(月・祝)

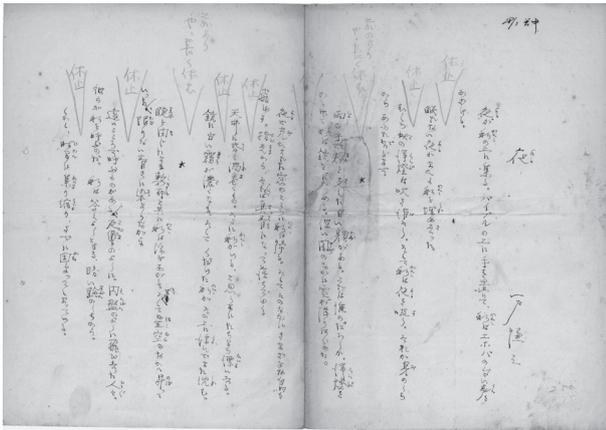


昭和41年3月18日撮影

一戸謙三
は、明治32(一八九九)年
青森県黒石町
(現黒石市)に
生まれまし
た。県立弘前
中学校を經
て、大正7(一九一八年、慶応大学医
学部予科)に入学、大正9(一九二〇)
年、医科本科に進むも経済的理由から
退学。その後大正10(一九二一年)に農
商務省に勤務しますが、翌年帰郷する
ことになりました。

一戸を詩の道へと導いたのは、弘前
中学校卒業後に読んだ福士幸次郎の詩
集『太陽の子』でした。その後、フラ
ンス象徴派美学の影響を受け、ドイ
ツ・オーストリアの新しいロマン主義を吸
収し、斬新な日本のシュールレアリス
ム詩を確立しました。その後、ジャコ
ブ、コクトー、イヴァン・ゴルの影響
のもと、散文詩形式による伝統とモダ

ンの結合を試みます。やがて、プロレ
タリア派との深刻な対立を経て、一戸
は方言詩へと向かっていきます。
県詩壇におけるリーダーとして長き
にわたり活躍した一戸謙三の詩業に迫
る展示です。



一戸謙三 草稿「夜」

目次

・平成三十一年度の予告	1
・特別展 平成の青森文学 開催報告	2
・高橋氏芥川賞受賞、長部氏急逝	3
・「本の装い」展 開催報告	4
・太宰治没後70年―秘蔵資料大公開―	5
開催報告	5
・13人の書画展開催中、パネル展報告	6
・エクステンド常設展示「北島八穂」開催報告	7
「追悼 長部日出雄」開催中	7
・第17回青森県近代文学館柳大会	8
・全国文学館協議会共同展示開催中	8
・日曜午後の朗読会報告	8
・資料寄贈者紹介	9
館務日誌	12

□今日出海展

―直木賞受賞から70年―

会期 二〇一九年十月二十六日(土)

二〇二〇年一月十三日(月・祝)

今日出海は、明治36(一九〇三年)に
函館で生まれました。父・武平と母・
綾はともに弘前出身であり、日出海の
長兄である東光も後に直木賞作家とな
ります。

旧制浦和高校を卒業した日出海は東
京帝国大学に進み、演劇や文筆活動を
開始。昭和7(一九三二年)からは明治
大学文芸科で教鞭を執ります。戦中は
陸軍報道班員としてフィリピン従軍を
経験。昭和25年に「天皇の帽子」を發
表し、第23回直木賞を受賞しました。
昭和43年から47年まで初代文化庁長官
を務め、昭和59年に80歳で世を去りま
した。

「天皇の帽子」による直木賞受賞か
ら70年という節目に当たり、直筆原稿
や著書、作品掲載誌を多数展示し、作
家・今日出海の生涯と足跡をご紹介します。

□作家×スポーツ展

会期 二〇二〇年二月二十二日(土)

五月十七日(日)

昭和39(一九六四年)年、オリンピック
が東京で開催されました。東京オリ
ンピックは、アジアで初めて開催され
たオリンピックであり、スポーツ界のみ
ならず、作家たちにも強いインパクト
を与えました。

本展では、二〇二〇年に開催される
東京オリンピックに先駆け、青森県近
代文学館が所蔵する「作家とスポーツ
にまつわる資料」を展示します。そし
て、スポーツに熱中した作家たちのエ
ピソードや、青森ゆかりの作家たちが
オリンピックやスポーツをどのように
観て、描いたのかについてご紹介して
いきます。

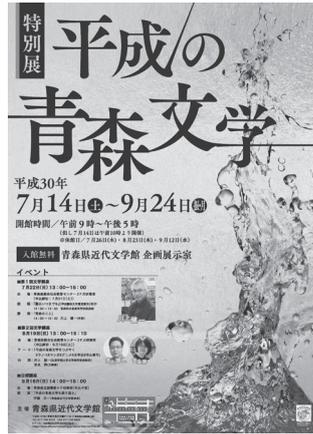
□エクステンド常設展示

青森県近代文学館の常設展示作家た
ちからピックアップし、展示コーナ
を拡大する「エクステンド常設展示」。
二〇一九年五月三十一日(金)からは太
宰治、十二月五日(木)からは、寺山修
司を取り上げる予定です。

「特別展 平成の青森文学」開催報告

会期 平成30年7月14日(土)

～9月24日(振・月)



青森県は、明治、大正、昭和と、その時代時代に多くの個性豊かな文学者を輩出してきましたが、青森の風土から生み出され受け継がれた「青森文学」の伝統は、平成の世にどのような形で流れ込んだのでしょうか。本展は、区切りを迎えようとしている平成の時代、その30年間における青森文学の展開を概観するものでした。

開会式には、吉田徳壽氏、米田省三氏、藤田晴央氏、世良啓氏、野沢省悟氏をお招きしてテーブルカットを行いました。



開会式テーブルカット

■展示会場が一つのアンソロジー(作品集)―豪華執筆陣による特別寄稿

日本屈指の文芸評論家・三浦雅士氏の巻頭言を筆頭に、梅内美華子氏、田澤拓也氏、川上健一氏、西崎憲氏、堀川アサコ氏、木村友祐氏、高森美由紀氏、高橋弘希氏、藤田晴央氏、古川智映子氏、呉勝浩氏、世良啓氏、米田省三氏、野沢省悟氏、吉田徳壽氏という錚々たる16名の方々から寄せられた「平成の青森文学」をテーマとしたエッセイをパネル展示しました。



三浦雅士展示コーナー

■平成を彩った青森ゆかりの文学者たちの直筆資料ほか

日本近代文学館所蔵のなかにし礼氏直木賞受賞作浄書及び校正原稿、

NHK朝の連続テレビ小説「あさが来た」原作者・古川智映子氏から寄贈していただいたドラマ台本を展示しました。



古川智映子展示コーナー

また、成田千空、三浦哲郎、長部日出雄、三浦雅士、梅内美華子、田澤拓也、木村友祐、藤田晴央、高森美由紀ら、平成を彩った文学者の直筆資料等を著書とともに展示しました。活字の向こう側にいる著者の息づかいを感じていただけたかと思えます。



梅内美華子展示コーナー

激動の時代を反映し、平成の青森文学は実に多彩な広がりを見せましたが、その根底には、青森人の素朴な心が一つの水脈をなして存在し続けているように思われました。総展示資料数は三一〇点、会期中の来場者数は三三七三人でした。

(伊藤文一、室長)

関連イベント

第1回文学講座―朗読と講演―

平成30年7月22日(日)

青森県総合社会教育センター

(参加者数68名)

朗読「翼はいつまでも」ほか

出演：青森明の星高等学校放送部

講演「青森のこと」

講師：川上健一(作家)



講演する川上健一氏

第2回文学講座―トークセッション―

平成30年8月19日(日)

青森県総合社会教育センター

(参加者数58名)

テーマ「平成の青森文学をつぶやく

#ラノベ#マンガ#アニメ#太宰治

#寺山修司」

出演：井上諭一(弘前学院大学文学部

学部長教授)・世良啓(文筆家)

日曜講座

平成30年9月16日(日)

青森県立図書館研修室

(参加者数30名)

「平成の青森文学を振り返る」

講師：伊藤文一

(青森県近代文学館室長)

高橋弘希氏「送り火」で
第159回芥川賞受賞



高橋弘希氏
平成27年9月撮影

青森県十和田市生まれの作家・高橋弘希氏が、「送り火」で第159回芥川賞を受賞されました。本県出身作家としては、昭和36年に三浦哲郎氏が「忍ぶ川」で受賞してから57年ぶり、二人目の芥川賞受賞となります。

戦争を知らないはずの世代が、あまりにリアルに戦争の現実を描いたとして話題をさらった衝撃的デビュー作「指の骨」で新潮新人賞を受賞した際、高橋氏は、「音のない音、形のない形、心のない心、言葉では書き下せない対象を物語で括って『言葉』に落とし込める事は出来るだろうか」と述べていらつしやいますが、受賞作「送り火」に至るまで、一貫してこの境地を追求されているようにも思われます。今後どのような世界を我々に見せ、感じさせてくださるか。高橋さんのご活躍に期待しています。

長部日出雄氏急逝



平成30年10月18日、青森県を代表する13人の作家であり、唯一現役で活躍されていた長部日出雄氏が急逝されました。長部氏には、当館が開館した平成6年以来、平成13年の「特別展 長部日出雄展」を初め、永きにわたって多大なるご協力をいただいて参りました。

文芸評論家の三浦雅士氏は、平成30年夏の特別展「平成の青森文学」に寄せてくださった文章の中で、「青森の平成文学とでも言うべきものがかりにあるとすれば、三浦哲郎と長部日出雄にまず指を屈する」と述べていらつしやいます。新幹線の開通により、地方の特色が一举に薄れ、画一化の進んだ平成において、なお青森には、その風土に起因する「過激さ」がしぶとく残っているとし、その「過激さ」を体現しているのが、南部出身の三浦氏と、津軽出身の長部氏であるということです。平成30年12月6日からは、常設展示

室の展示スペースを拡大した長部氏の特集展示を予定し、開催についてご連絡も差し上げていたところだっただけに、突然の訃報への驚きと悲しみには大きなものがありました。

長部氏は、歴史、社会、宗教、哲学、思想、芸術、映画等、広範なジャンルにわたって小説、評伝、エッセイ等、数多くの作品を手がけられました。評伝だけを見ても棟方志功、太宰治、マックス・ヴェーバー、木下恵介と実にバラエティーに富んでいます。しかし、どの作品においても、一人の人間に焦点を当てながら、時代の姿を浮かび上げさせ、「人はどこから来て、どこへ行くのか」というテーマを追い求めていらつしやったように思われます。

小学生の時に敗戦を迎え、それまでの軍国主義の世が、瞬く間に民主主義一色になる経験をし、その十数年後には、民主主義の崩壊を象徴する安保闘争の敗北を目の当たりにした長部氏。自国の「正義」をふりかざす戦争が、何の関係もない土地の人々を踏みつけた事実を、兄が戦死したフィリピンを訪れて知ったことが、大きな転機となります。

ソ連の崩壊、暴走する資本主義、イスラム原理主義の台頭——戦前、戦中、戦後と、世界情勢の推移をつぶさに見てきた長部氏が、人生の最終章で提唱したのは、マックス・ヴェーバーから学んだ、多元的価値観の共存でした。

自身の最期を見据え、亡くなる一か月ほど前に書かれた関係者宛てのメッ

セージには、「私が読者に一番伝えたかったことは、大体この本に記してあります」として、墓碑に刻む代表作を『古事記とは何か 稗田阿礼はかく語りき』とすることが記されていたといえます。行き詰った日本の「転轍機(てんてつき)軌道を変える装置」として提示されたのが、『古事記』以来の多元的な日本文化の継承でした。



三内丸山遺跡にて
平成12年11月 撮影 サトウウジ氏

危機的状況にある現在の日本に対し、「源に立ち返れ」というメッセージを長部氏は残しました。それは、東京での生活に行き詰まり、故郷に戻って、以前は田舎臭い時代遅れのものとして考えていなかった「津軽」の魅力を発見し、自身の活路を見出した経験と重なるようにも思われます。長部氏のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

「本の装い」展 開催報告

会期 平成30年2月24日(土)

～5月20日(日)



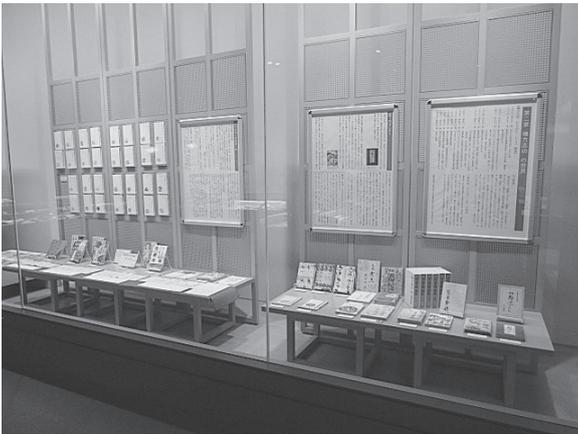
2月24日(土) から5月20日(日)まで、「本の装い」展を開催しました。青森県出身の版画家たち(棟方志功、関野準一郎、佐藤米次郎、蘭繁之)が携わった装丁本や挿絵、阿部合成と佐野ぬいの表紙絵原画と装丁本、村上善男の装丁本等、697点展示しました。美しい装丁本の展示を軸にしながら、「文学館ならではの面とは何か」を考え、装丁者の本に対する思いや著者とのエピソードを本の中から探し、ご紹介しました。

青森県は版画家による装丁本が多く作られたことから、県立郷土館に協力いただき、昭和初期の青森県の版画家たちの流れがわかる資料を特別に展示していただきました。今純三の版画「コケシとエチコオボコ」の原画や、根市良三による太宰治『思ひ出』の表紙原

画などの貴重資料が期間限定で展示されました。

棟方志功の装丁本は350冊以上といわれています。最初の装丁本と言われる百田宗治『路次ぐらし』他、初期の装丁本を展示し、晩年の装丁本との違いを見ていただけるようにしました。

また、棟方志功が装丁した谷崎潤一郎の装丁本『鍵』『夢の浮橋』を展示しました。谷崎に宛てて書かれた棟方の書簡や、壁に飾った『谷崎潤一郎全集』30巻分の箱の表紙からは、棟方の谷崎に対する敬意が窺えます。青森県知事を務めた竹内俊吉の俳句を棟方が板画にした「県政のあゆみ」を一年分展示しました。棟方がそれぞれに寄せた「表紙のことば」とともにご覧いただきました。



関野準一郎のコーナーでは、所蔵している私家本を中心に展示しました。関野が著書『木版画の楽しみ』の中で、「私家版ならば、他人の迷惑は一切気にせず、自分の欲することだけをやる。売ることなどは考えず、作りたい本を作る喜びは他にかえられない。」と述べています。その私家本を、関野自身の解説とともに展示しました。

佐藤米次郎のコーナーでは、青森の子どものために作られた本を中心に展示しました。青森豆本は、版画で青森の郷土玩具や伝説を掘って豆本にしたものです。小さなお客様が「かわいい」と喜んでいる姿が印象的でした。

蘭繁之が「わたしの存在証明のような」仕事と述べた『緑の笛豆本』は、2回の展示替えを行うことで、全巻展示することができました。『緑の笛豆本』は423集の存在が知られていましたが、このたび

424集『アルプスの花』(後藤莊二郎著)が開催前に見つかり、初展示することができました。



阿部合成のコーナーでは、青森中学時代の太宰治とのエピソードを紹介しながら、太宰治の『千代女』『風の便り』『女性』を展示しました。また、今官一の『壁の花』『幻花行』の表紙原画

と装丁本を並べて展示しました。

『北畠八穂児童文学全集』を、佐野ぬいの表紙絵原画と見返し原画とともに展示しました。佐野ぬいが「婦人の友」に掲載した「表紙絵にそえて」を読みながら「婦人の友」をご覧いただけよう展示しました。



村上善男のコーナーでは、村上の装丁に対する著者の思いを紹介しながら、図書雑誌を展示しました。また、村上の活版印刷と明朝体に対する熱い想いを紹介しました。

「本の装い」展の準備を通じて、紙の本がもつ温度、人と人とのつながりの温かさを感じました。本を情報の媒体と捉え、文字を記号として用いる世界では、この温かみは感じられないのではないかと思います。「本の装い」展は、「本」のもつ温かさに気づかされる展示となりました。

82日間の会期中、三五九八名の方にご覧いただきました。5月13日(日)の日曜講座「本の装い」と文学」には25名の方々に参加いただきました。(武永佐知子、文学専門主査)

「太宰治没後70年」秘蔵資料大公開——開催報告

会期 平成30年10月27日(土)

平成31年1月14日(月・祝)

太宰治は明治42(一九〇九)年に北津軽郡金木村(現五所川原市)で生まれ、「人間失格」を連載中だった昭和23(一九四八)年に世を去ったので、二〇一八年は没後70年の節目に当たりました。さらに二〇一九年は生誕110年と、メモリアルが続きます。この2年にまたがるタイミングで当館では、所蔵している太宰資料の数々を公開し、その生涯と業績を振り返る企画展を開催しました。

展示室の基本の動線には、故・相馬正一氏が当館の特別展「太宰治」(平成7年開催)のために編んでくださった「太宰治略年譜」をパネル化して掲げました。そして、各パネルに隣接した展示ケースに資料を振り分け、年代順に配置するという構成を取りました。

少年期の資料としては、明治高等学校時代に使用した「豫習用讀方帖」と「入学試験 運算」の学習ノート2冊を、青森中学時代の資料では太宰最古の創作と言われる「最後の太閤」が掲載された「生徒会誌」第34号を展示しました。

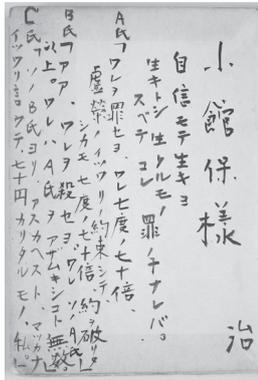
官立弘前高等学校時代の資料では、人物の顔の落書きが見られる世界地図帳、太宰が主宰した同人雑誌「細胞文藝」の創刊号、当時用いていた筆名の

サインや相合い傘で歩く男女の落書きが見られる「化学ノート」等が並びました。

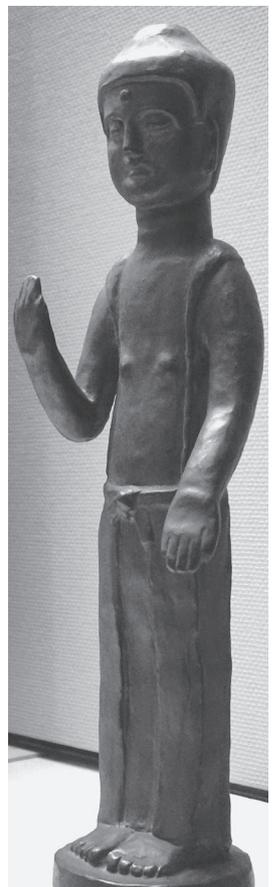
東京帝国大学仏文科入学のため上京した昭和5年以降のゾーンには、色紙「亀の子 われに問へ 春ちかきや」、小館保・善四郎兄弟(太宰の姉きやうが嫁いだ小館貞一の弟たち)が1冊ずつ所蔵していた直筆の句帖「亀の子」等、太宰の俳句に関する資料が集まりました。

青年期に参加していた同人雑誌では、「海豹」創刊号(「魚服記」掲載)、「鶴」第1輯(「葉」掲載)、「青い花」創刊号(「ロマネスク」掲載)等を飾ることができました。

第一創作集『晩年』に関する資料のコーナーは、取り分け充実したものとなりました。当館では、小館保宛と小館善四郎宛の2冊の献辞入り本を所蔵しています。前者は「自信モテ生キヨ生キトシ生クルモノ スベテコレ罪ノ子ナレバ」と書き込まれた、文芸ミステリー「ビブリア古書堂の事件手帖」(三上延作)に登場する『晩年』のモデルとなった1冊。後者は「ワレヨリカナシミフカキモノ」と記された1冊です。



『晩年』小館保宛献辞部分



津島圭治作の仏像

上記2冊に加え、今回は津島逸朗に宛てた『晩年』(個人蔵)を特別展示することができました。10月12日の「東奥日報」朝刊によって存在が明らかになったばかりの新資料でした。弟同然に接した甥への献辞を太宰は「ワタル世間二鬼ノナキコトヲ信ジ玉へ」という言葉で結んでいました。なお『晩年』は、出席者37人の署名が見えるように全面拡げて飾りました。

中期以降の資料では、「女生徒」執筆の題材となった有明淑の日記、門人である小山清や菊田義孝、堤重久に宛てた書簡等を展示しました。当館で所蔵している「お伽草紙」の草稿は、前書きと「瘤取り」のみが和綴し本になったものです。神奈川近代文学館「生誕105年 太宰治展」において発見された、太宰が「お伽草紙」に引用したとおぼしき絵本『コブトリ』(武内俊子文・河目悌二画)と並べて飾りました。

最晩年の資料としては、構想メモが書き込まれた「文庫手帖」2冊や「人間失格」の草稿6枚があり、遺品は愛用のエヴァーシャープの万年筆ほか合計7点を展示。金木疎開中身辺に置いていたという三兄・圭治作の仏像は、芸

術家を志しながら早世した兄に対する太宰の思いの深さを物語るものでした。太宰の没後、美知子夫人は原稿を守り伝える活動をしました。当館蔵の原稿「メリイクリスマス」と「家庭の幸福」が太宰の着物を表紙に装本されているのは、そのためです。特に後者は長女の津島園子氏から、平成6年に当館開設を記念し、ご寄贈いただいたものです。

本展を通して、当館には太宰治の生涯全体を振り返り得る、多くの宝物が集まっているということを再認識できました。館蔵の資料186点に個人蔵の1点を加え、総資料点数は187となりました。11月18日には日曜講座「青森県近代文学館が誇る珠玉の太宰資料」を実施。会期中三二八人の方が足を運んでくださいました。(竹浪直人、文学専門主幹)

青森県近代文学館資料集第11輯

『太宰治・旧制弘高時代ノート「化学」』(非売品)を11月22日に刊行しました。安藤宏氏による解説を含め、全ページをPDF化してホームページ上で公開しています。ぜひ、ご覧ください。

13人の書画展・開催中

会期 平成31年2月23日(土)

～5月19日(日)



青森県近代文学館の収蔵資料には、作家の直筆の書軸、短冊、色紙、スケッチ等もあります。今回の企画展では、常設展示している13人の作家が書いた「書画」(書軸、短冊、色紙、スケッチ等)を展示しています。

〔展示構成と展示資料一例〕※印は初展示

〔書軸〕

・秋田雨雀

「赤蜻蛉高く飛べとべ雨はれた」※

・葛西善蔵

「音もなく秋雨けぶる湯の宿に

酌みかはしけり別れの酒を」

・福士幸次郎

「人は其の理由の何たるやを

知らざれ共その祖国を愛す」

・太宰治

「常人の恋ふといふよりはあまりにて

我は死ぬべくなりたらずや」

〔短冊〕

・佐藤紅緑

「大國の夕日を見よや麥の秋」※

・石坂洋次郎

「私の関心は常に人間の上にある」※

〔色紙〕

・北畠八穂

「まつ葉のむき 梢のむき

そのむきを ゆびたどれば

おのづから すみやかなり」

・高木恭造

〔こげし〕

・今官一

「花まぼろしの世に在らば

世も幻の花ならん」

・三浦哲郎

「笛と雪が好きである

秋祭りの賑やかな

北国の村で暮したい」

・長部日出雄

「津軽に生きる」

・寺山修司

「ころがりしカンカン帽を追うごとく

ふるさとの道駆けて帰らむ」※

〔スケッチ〕

・北村小松

「アユチヤにて」

作家たちの個性は、筆跡やフレーズとなつて書画に表れます。直筆の書画を通して、常設展の13人の個性と新たな魅力を発見していただけたらと思います。

パネル展 開催報告

新たに「平成の青森文学」「作家と出会うパネル展」を製作しました。会場・期間は次のとおりです。

◇「作家と出会うパネル展」

青森県立弘前南高等学校

4月1日～3月31日

◇「菊合栄」パネル展

油川市民センター

4月21日～4月27日

◇「児童文学者・鈴木喜代春展」パネル展

横浜町ふれあいセンター

4月20日～5月30日

◇「陸羯南と正岡子規」

子規庵

5月2日～5月31日

◇「太宰治」パネル展

金木観光物産館マディニー

6月1日～6月30日

青森県立弘前中央高等学校

7月12日～7月14日

伊藤忠吉記念図書館

10月12日～10月27日

◇「葛西善蔵」パネル展

横浜町ふれあいセンター

5月31日～6月29日

◇「太宰治生誕100年」パネル展

伊藤忠吉記念図書館

6月2日～6月30日

青森県立美術館

7月14日～7月21日

金木観光物産館マディニー

10月12日～10月27日

◇「棟方志功と青森の文学」パネル展

青森県立青森西高等学校

7月13日～7月14日

◇「鳴海要吉」パネル展

青森県立三沢高等学校

7月13日～7月16日

◇「三浦哲郎」パネル展

青森県立八戸高等学校

7月14日～7月15日

◇「北村小松生誕110年展」パネル展

横浜町ふれあいセンター

7月6日～8月28日

◇「平成の青森文学」パネル展

青森県立北斗高等学校

10月9日～10月16日

◇「青函を旅した文人たち」パネル展

横浜町ふれあいセンター

10月19日～12月20日

◇「青函を旅した文人たち」パネル展

横浜町ふれあいセンター

9月1日～10月14日

◇「寺山修司没後30年」パネル展

青森県立中里高等学校

10月19日～10月20日

◇「加藤謙一と佐藤紅緑」パネル展

横浜町ふれあいセンター

12月26日～2月20日

◇「大庭れいじの世界」パネル展

県総合社会教育センター

1月13日



秋田雨雀書軸「赤蜻蛉高く飛べとべ雨はれた」



エクステンド常設展示
「北島八穂」開催報告

会期 平成30年6月1日(金)

～11月28日(水)



北島八穂は、逆境にめげずたくましく生きる子どもたちの姿を描いた児童文学作家です。八穂の作品を初めて読んだとき、時代は違っても、八穂のこゝろは現代社会を生きる私たちにもみみずみずしく響くと感じました。八穂の作品を読んだことがない方にもこの機会に読んでいただきたいと考え、作品の一部を紹介しながら、八穂の想いも紹介しました。

最初のケースには「萌えろ青森童話」の原稿を展示しました。これは、青森県児童文学研究会の北彰介の依頼にこたえて八穂が「励ましのこゝろ」として寄せたものです。津軽弁を交えた温かい文章で、後輩作家たちを激励しています。
ないないないないとブックサウイウのは貧乏性です。充分にみつげ出して童

話の素材にしましょう。(「萌えろ青森童話」より)

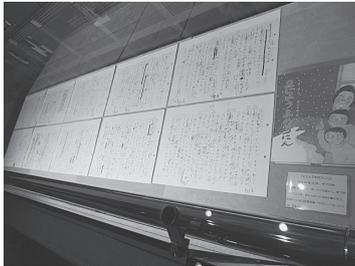
ケース②に展示した『あくたれ童子ポコ』は、戦争で父を失い、母が失踪したポコ少年がかなしみやつらさを跳ね返す作品です。

気をつけて見まわすと、そこらじゅう、かなしみと、つらさだらけです。しかも、かなしみや、つらさに、フヌケにされたり、とらまわって、しばらくつけられたり、そのために、また、かなしみや、つらさを、ふやして、まきちらしたり、しているではありませんか。『あくたれ童子ポコ』あつがきより)

ケース⑤では『2じょうまの3にん』の収録話を直筆原稿で読んでいただけるようにしました。直筆原稿「ちえのわく家」、「四かいのおとうさま」、「すばらしいみつげもの」をそれぞれ期間限定で展示しました。

昭和48年に映画化された『耳のそのさかな』や、

第10回野間児童文芸賞、第19回サンケイ児童出版文化賞大賞を受賞した『鬼を飼うゴロ』等の図書・雑誌も展示しました。



エクステンド常設展示
「追悼 長部日出雄」開催中

会期 平成30年12月6日(木)

～5月26日(日)



弘前市生まれの作家・長部日出雄は、週刊誌記者、ルポライター、映画評論家等を経て作家活動に入り、昭和48年第一創作集所収の「津軽世去れ節」「津軽じょんから節」で第69回直木賞を受賞、昭和54年、『鬼が来た 棟方志功伝』で第30回芸術選奨文部大臣賞、昭和62年、『見知らぬ戦場』で第6回新田次郎文学賞を受賞しました。昭和64年には、自身の原作・脚本・監督による映画「夢の祭り」でモントリオール国際映画祭に参加、その後も歴史、社会、宗教、哲学、思想、芸術、映画等、広範なジャンルにわたって小説、評伝、エッセイ等、数多くの作品を手がけました。

長部氏の、直木賞受賞作「津軽世去れ節」「津軽じょんから節」前後の活動を中心に紹介する予定だったエクステンド常設展示は、平成30年10月の突然の悲報を受け、氏の追悼展として開

催することとしました。長部氏からこれまでいただいた、当館に対する数々のご協力に心から感謝し、氏の作家としての歩みを振り返る展示を構成しました。

平成31年1月20日(日)に、長部氏を偲び、追悼朗読会「津軽を愛した魂へー長部作品をよむ」を開催しました。「あ、断餌鬼」「津軽じょんから節」「鬼が来たー棟方志功伝」「見知らぬ戦場」「古事記とは何かー稗田阿礼はかく語りき」の5作品を、アナウンスユニット「あおもりボイスラボ」の皆さんに朗読していただき、37名の方に参加していただきました。



第17回青森県近代文学館川柳大会
開催報告

平成31年3月3日(日)、第17回青森県近代文学館川柳大会を、県立図書館集会所において開催いたしました。県内外から83名の方に参加いただきました。今回の宿題は、「裏」「デリケート」「おろおろ」「平成」でした。また当日発表の席題は、企画展示室で開催中の「13人の書画展」の展示物から、「寺山修司色紙『過去は一つの異国である』」でした。

今年の講演は、前川柳研究社代表の津田暹氏をお迎えし、「川柳と私」という題で講演していただきました。川柳を詠み、選ぶに当たってのご自身の取り組みを、具体的な事例、句を交えてお話いただきましたが、ユーモアあふれる軽妙な語り口に魅了され、あつという間の一時間でした。印象的だったのは、ご自身が大きな逆境に置かれた際、川柳によって救われたというお話で、川柳の持つ力の大きさを改めて感じた次第です。

【特選受賞作】

席題「寺山修司色紙『過去は一つの異国である』」きょらぎ彼句吾選
未だ潮騒修司の修の人偏は

野沢省悟

席題「寺山修司色紙『過去は一つの異国である』」木村美映選

振り向けば燃えないゴミが一つある
三浦敬光

宿題「裏」福間志津子選
泣くための椅子なら戯画の裏にある

千島鉄男

宿題「裏」須田たかゆき選
自叙伝の裏は喋らぬ揚羽蝶

三浦敬光

宿題「デリケート」千葉かほる選
千代紙の鶴と余命の中にいる

千島鉄男

宿題「デリケート」瀧尻善英選
母ちゃんと嫁さんそして僕の位置

稲見則彦

宿題「おろおろ」吉田吹喜選
大皿で解凍されてゆくワタシ

岩崎雪洲

宿題「おろおろ」辻口風来坊選
途中からルビを忘れた答弁書

瀧尻善英

宿題「平成」渡邊こあき選
平成が終るざらつく喉仏

今泉敏雄

宿題「平成」大石一粹選
平成のさくら吹雪を見に行こう

村田けん一

全国文学館協議会共同展示
「3.11文学館からのメッセージ」開催中

会期 平成31年3月1日(金)

3月27日(水)



「青森の文学者たちが描いた自然災害」

東日本大震災(平成23年3月11日)を契機として、鎮魂と感謝を願う心から始まった全国文学館協議会の各館による共同展示ですが、今年で7回目を数えるに至りました。当館では「青森の文学者たちが描いた自然災害」というテーマで、パネル展示を行っています。常設展示作家たちが手掛けた作品の中から、自然災害との関わりが深いものを厳選してパネル化し、企画展示室前のロビーに掲げました。具体的には、佐藤紅緑、秋田雨雀、葛西善藏、福土幸次郎、石坂洋次郎、北村小松、北畠八穂、高木恭造、太宰治、今官一、村次郎、三浦哲郎、長部日出雄、寺山修司の14名の作品を、各人1編ずつ取り上げた訳ですが、引用文には強風や地震、大雪、凶作等が登場し、災害の多様さを訴える展示ともなりました。

日曜午後の朗読会報告

今年度の朗読会は全7回、のべ54名の方にご参加いただきました。2人の解説員が担当しました。

- ① 4月22日 佐藤米次郎『津軽むがしこ集』
- ② 5月27日 今官一『第十二号棧橋』
- ③ 6月24日 北畠八穂『耳のそのさかな』
- ④ 8月26日 三浦哲郎『みちづれ』
- ⑤ 9月23日 長部日出雄『鰐を連れた男』
- ⑥ 10月28日 太宰治『きりぎりす』
- ⑦ 11月25日 寺山修司

『赤糸で縫いとじられた物語』



フェイスブック継続中

青森県近代文学館のフェイスブックでは、文学館に住む「くまきち」が、イベントや青森の作家・文学についてご紹介しています。

来年度から新コーナーが登場予定です。「青森県近代文学館 フェイスブック」で検索するとご覧いただけます。



資料寄贈者紹介

次の方々から資料を寄贈していただきました。誠にありがとうございました。今後とも当館へのご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。

(敬称略・五十音順)

今期のご寄贈(平成30年1月〜12月)

- 一戸晃一『詩人 一戸謙三の軌跡 第五集』他図書三冊
- 一茶記念館―「小林一茶百九十二回忌 全国俳句大会作品集」
- 井上直哉―北村小松原稿「望空夜話」について」他図書一冊
- 茨木市立川端康成文学館―『平成29年度川端康成文学館俳句コンクール入賞・入選作品集』
- 岩崎眞里子―手作り布絵本「手縫いの子」消えやらぬ人とことば」他図書四冊
- 馬の博物館―『馬の博物館研究紀要』第20号
- 梅内美華子―直筆詠歌の短冊二点・色紙二点
- NPO 婆婆羅凡人舎―『第1回/第2回 浪岡バサラ文学賞・作品集』
- 大田区立郷土博物館―『作品の中の 大田区―文士・画家の描いた風景』
- 小山眞史―『歌集 雪』
- かごしま近代文学館―『描かれた西郷どん展』
- 神奈川文学振興会―『没後10年 石井桃子展』他図書二冊
- 鎌倉文学館―『鎌倉時代を読む』他図書一冊
- 紙谷直機―『プーシキン全集 第二巻』他図書一冊・雑誌一冊
- 川上健一―色紙「君の勇気の翼に」
- 川口浩一―「トンボ」第五号二冊
- 木崎野短歌会―『蒼天』二冊
- 北九州市立文学館―『北九州市立文学館紀要』第1号
- 北九州市立松本清張記念館―『清張オマージュ展』他図書一冊
- 北山まみどり―『川柳と少女マンガと』二冊 他図書二冊
- 木村捷則―録音CD「木村助男作 方言詩集」土筆(べべこ)より「養鶏」
- 木村美映―「日本短歌協会会報」35
- 木村友祐―『幸福な水夫』初校ゲラ・再校ゲラ
- 久慈きみ代―『津軽の源氏物語』
- 工藤邦男―『弘前潮音歌集(第二集)』
- くまもと文学・歴史館―『蒙古襲来 絵詞と竹崎季長』
- 黒岩恭介―『九州産業大学造形短期大学部紀要』第40巻
- 群馬県立土屋文明記念文学館―『愛の手紙』他図書三冊
- 高知県立文学館―『高知県立文学館 開館20周年記念誌』
- 郷よしゆき―『詩―物語の序章』二冊
- 国際芸術センター青森―「AC2」No.19
- 国際メディア・女性文化研究所―「比較メディア・女性文化研究」創刊号 他図書一冊
- 国民みらい出版―『現代短詩型文学作品集 よみびと 第7集』
- 後藤庄二郎―『日本の心川 改訂版』
- 近藤洋子―『三浦哲郎初期恋愛小説』
- さいたま文学館―『田山花袋と明治の文学』他図書一冊
- 齊藤しじみ―『NHK介護百人一首 2018』
- 桜庭和浩―演劇「奴婢訓」・「毛皮のマリー」ちらし他図書二冊
- 笹田かなえ―『川柳作家ベストコレクション』 笹田かなえ 二冊 他雑誌一冊
- 佐藤岳俊―『川柳人』No.939
- 志賀道哉―『志賀直哉コレクション 1.〜15.の追加本』他図書二冊・DVD 三点
- 清水雪江―『千青』創刊号 他雑誌十冊
- 主婦と生活社―『NHKガッテン!』vol.39 二冊
- 小学館―『女性セブン』(56-14)
- 城西川柳愛好会―『城西川柳愛好会 合同句集第七集』
- 清流出版―『清流』(26-1)
- 仙台文学館―『井上ひさしの国語教室』
- 川柳「風の会」―『第五十四回青森市民文化祭川柳大会』二冊
- 大黒谷サチエ―『川柳作家ベストコレクション』 大黒谷サチエ
- 高木保―高木恭造「まるめる」朗読レコード(CBSソニー版)他雑誌二冊
- 節のふるさと文化づくり協議会―『土のふるさと 第20回長塚節文学賞入選作品集』
- 高田寄生木―第一回川柳Z賞切抜合本 他図書十五冊・雑誌十冊
- 高梁比庵会―『第九回清水比庵大賞「短歌の部」入賞作品集』
- 高森美由紀―パソコン(東芝ダイナブックサテライトJ60)・『みとりし』関係資料三点・直筆色紙一点
- たかんな発行所―『えんぶり彩時記』他図書三冊
- 田澤拓也―『私の青森三部作』浄書原稿・校正原稿他図書二十二冊
- 鬣の会―『鬣』第68号、第69号
- 短歌結社「草の会」―平成二十九年 度歌会詠草集『木漏れ日』二冊
- 千葉芳醇―『北国の四季』
- ちゅうでん教育振興財団―『New
- 会津八一記念館―『中村屋サロンと 會津八一』
- 青森県『青森県史』通史編3
- 青森県観光連盟―『あおもり教育旅行ガイドブック2018』
- 青森県詩人連盟―『青森県詩集 青森』2018 他図書一冊・雑誌一冊
- 青森県川柳社―『合同句集・記念誌』
- 青森県川柳連盟―『青森県川柳連盟 だより』第1号
- 青森県俳句懇話会―『新青森県句集』第29集
- 青森古今短歌会―『合同歌集 木漏れ日』二冊
- あおもり草子編集部―『あおもり草子』第二五〇号 他雑誌四冊
- 青森文芸出版―『野坂十二楼句集稿』他図書一冊
- 茜短歌会―『合同歌集 日乗の韻』
- 秋田雨雀記念館―『赤い鳥100年』
- 浅木原忍―色紙「連城三紀彦よ、永遠なれ!」
- 浅瀬石久仁子―『第1回/第2回 浪岡バサラ文学賞・作品集』
- 尼崎市総合文化センター―『文芸作品集』平成二十九年度

- えるふ」Vol.16
- チューニング・フォー・ザ・フューチャー―『江渡狄嶺資料展「924旅」』
- 調布市武者小路実篤記念館―『新しき村の一〇〇年』他図書三冊
- 鶴賀イチ―『会津文芸』第2号
- 東京美術―『寺山修司 時をめぐる幻想』三冊
- 藤樹社―『書道界』通巻348号
- 徳島県立文学書道館―『寂聴「手毬」』他図書一冊
- 富岡昭―『松雪庵選句集』他図書三冊
- 中原中也記念館―『大岡昇平と中原中也』
- 西谷是空―『きじ鳩』通巻251号 他雑誌十一冊
- 日本現代詩歌文学館―『ゲームと詩歌』他図書一冊
- 野沢省悟―高田寄生木関係資料二点 他図書一冊
- はしかみ川柳会―『はしかみ川柳会 第九集』
- 葉名尻竜一―『寺山修司』他図書一冊
- ぴあ株式会社―『文豪とアルケミス トぴあ ゆかりの地めぐり』
- 姫路文学館―『怪談皿屋敷のナゾ』
- 平井重治―『歌集 列島のだぼ』二冊
- 弘前学院大学地域総合文化研究所―『地域学』十四巻
- 弘前市立郷土文学館―『名編集長・加藤謙一―『少年倶楽部』から『漫画少年』へ』二冊
- 廣澤春任―『廣澤安任個人史資料 探訪』
- 深澤茂樹―『村次郎の夜語り』他雑誌一冊
- 福士光生―『稚き智たちの旅』二冊
- ふくやま文学館―『福原麟太郎の隨筆世界』
- 藤田晴央―浄書原稿「夏至」・「夜顔」・「岩木川」他特殊資料八点・図書三冊・雑誌四冊
- 古川智映子―『土佐堀川』プログラム
- 文学で青森を応援する会―『文学で青森を応援する会 紀要』1-2冊
- 文京区立森鷗外記念館―『明治文壇 観測』他図書二冊
- 北苑歌話会―『合同歌集 花信』二冊
- 北海道文学館―『北海道文学館から』
- 北海道立文学館―『有島武郎と未完の『星座』』他図書二冊
- 北方新社―『ALLO:ALLO』他図書二冊
- 前橋文学館―『サクタロウをアートする』他図書一冊
- 松山市立子規記念博物館―『幕末維新と松山藩』
- 三浦綾子記念文学館―『こだわり、てづくり。三浦綾子記念文学館、市民と20年』
- 三浦慶子―『三浦哲郎の世界』他図書十四冊・雑誌六冊
- 三浦雅士―浄書原稿「津軽の文学、南部の文学―過激な青森の行方」冒頭部
- 三門幸子―『おしらさま遊ばせ』
- 三鷹市スポーツと文化財団―『太宰治 三鷹とともに』二冊
- 三鷹市山本有三記念館―『三鷹市山本有三記念館 所蔵資料目録』
- 未來社―『幸福な水夫』
- 村次郎の会―『八戸の詩人 村次郎』
- 森英一―『林政文の生涯』他図書二冊
- 守田啓子―『川柳作家ベストコレク ション 守田啓子』二冊
- 山本弘志―『随想集 腹ふくるる事』
- 「樸」俳句会―『日日の歌 神敏雄作品集』
- 吉田利秋―『川柳大学』第六十一号 他雑誌六十二冊
- 吉村昭記念文学館―『津村節子展 生きること、書くこと』他図書一冊
- 立正大学文学部―『文学における「隣人」―寺山修司への入口』
- 渡部芳紀―『東京人』(33-8)他雑誌一冊
- 會津八一記念館―『雁魚來往(六〇)』
- 青嶺俳句会―『青嶺』
- 青森アララギ会―『青森アララギ』
- 青森県歌人懇話会―『青森県歌集』
- 青森県教育厚生会―『三潮』
- 青森県現代俳句協会―『青森県現代俳句年鑑』
- 青森県川柳社―『ねぶた』
- 青森県退職高等学校校長会(さつき会)―『さつき会たより』
- 青森古今短歌会―『青森古今』
- 青森文学会―『青森文学』
- 青森文芸出版―『あおもり文芸さろん』
- 「会報『千空研究』』
- 井上康―『みちのく春秋』
- 井上靖記念文化財団―『伝書鳩』
- 井上靖研究会―『井上靖研究』
- 小笠原茂介―『第三次「RA」『午前』』
- おかしようき川柳社―『おかしようき』
- 大佛次郎記念館―『おさらぎ選書』
- 小田桐妙女―『俳句鼎 妙』
- 小山正見―『感泣亭秋報』
- 飾画の会―『飾画』
- 風詩社―『詩誌「風」』
- 金沢文化振興財団―『研究紀要』
- 「神津恭介ファンクラブ」事務局―『らんだの城通信』
- 北の街社―『北の街』
- 陸羯南会―『陸羯南会誌』
- 国原社―『国原』
- 黒艦隊―『俳句同人誌 黒艦隊』
- 群系の会―『群系』
- 薫風発行所―『薫風』
- 群馬県立土屋文明記念文学館―『群馬県立土屋文明記念文学館 紀要「風」』
- 勁草社―『勁草』
- 月刊弘前編集室―『月刊「弘前」』
- 越谷市立図書館 野口富士男文庫―『野口富士男文庫 第二十号』
- 五所川原俳句会―『五所川原俳句会 会報』
- 小山弘明―『光太郎資料49』『光太郎資料50』
- さわらび短歌会―『さわらび』
- 此岸俳句会―『俳誌「此岸」』季刊誌 此岸
- 紫明の会―『紫明』
- 下北文化社―『下北文化』
- 渋柿園俳句会―『渋柿園』
- 書肆 北奥舎―『北奥氣圏』
- 詩霊の会―『詩霊』
- 雪天俳句会―『雪天』『雪天句集 第12集』
- 全国文学館協議会事務局―『全国文学館協議会紀要』
- 川柳「風の会」―『風紋』
- 川柳触光舎―『触光』

- 川柳ゼミ 青い実の会―「青い実」
「青のメモリー」
- 川柳塔みちのく―「川柳塔みちのく」
- 川柳ひらなひ吟社―「川柳ひらなひ」
- 外海吟社―「外海」
- 泰斗舎―「あおもり芸術鑑賞友の会
文化情報誌 びーち」
- 高田寄生木―「北貌」
- 高山市生涯学習課―「高山市近代文
学館調査・研究報告書」
- たかな発行所―「たかな」
- 竹森茂裕―「奥の細道」別冊
- 潮音社―「潮音」
- 童子津軽句会―「津軽通信」
- 胴乱詩社―「胴乱」
- 徳島県立文学書道館―「水脈」
- 十和田かばちえつば川柳吟社―「川
柳かばちえつば」
- 中原中也記念館―「中原中也研究
第二十三号」
- 成田本店―「青春と読書」『図書』「波」
- 新美南吉記念館―「研究紀要」
- 日本歌人クラブ―「現代万葉集」
- 日本近代文学館―「日本近代文学館
年誌」
- 日本現代詩歌文学館―「日本現代詩
歌研究」
- 日本民主主義文学会弘前支部―「弘
前民主文学」
- 俳人協会―「俳句文学館紀要」
- hashomado―「本のパーキング」
- はちのへ川柳社―「川柳うまっこ」
- 八甲田川柳社―「川柳八甲田」
- 波濤短歌会青森支部―「波濤青森」
- 帆風美術館―「風」
- 姫路文学館―「姫路文学館紀要」
- 弘前川柳社―「川柳『林檎』」

- 弘前大学国語国文学会―「弘前大学
国語国文学」
- 弘前大学文芸部OB―「利宇古宇」
- 弘前文学学校―「文学いちば」
- 弘前文芸協会―「文藝弘前」
- 弘前ペンクラブ―「弘前ペンクラブ
ニュース」
- 風塵社―「風塵」
- 福田正夫詩の会―「焰」
- ふだん記津軽グループ―「ふだん記
津軽」
- 文藝軌道の会―「文藝軌道」
- 北苑歌話会―「北苑ノート」「北苑」
第1号
- 北狄社―「北狄」
- 松丘保養園松桜会―「甲田の裾」
- 宮沢賢治学会イーハトーブセンター
―「宮沢賢治研究Annual」
- 無名群社―「無名群」
- 村次郎の会―「風の軌跡 村 次
郎」通信
- 森の座青森支部―「未来」
- 森の座発行所―「森の座」
- 山田尚―「亜土 第三次」
- 山梨県立文学館―「資料と研究」
- 悠短歌会―「悠」
- 「樫」俳句会―「樫」
- 吉田徳壽―「八戸PEN」

《館報》

- 青森県総合社会教育センター
- 有島記念館
- 池波正太郎記念文庫
- 石川近代文学館
- 石川啄木記念館
- 石坂洋次郎文学記念館

- 泉鏡花記念館
- 一茶記念館
- 井上靖記念館
- 岩手県立埋蔵文化財センター
- 大島博光記念館
- 小川未明文学館
- かごしま近代文学館・メルヘン館
- 神奈川文学振興会
- 金沢文芸館
- 軽井沢高原文庫
- 北九州市立文学館
- 北九州市立松本清張記念館
- 虚子記念文学館
- くまもと文学・歴史館
- 高知県立文学館
- こおりやま文学の森資料館
- 高志の国文学館
- さいたま文学館
- 斎藤茂吉記念館
- 坂の上の雲ミュージアム
- 佐藤春夫記念館
- 白鳥省吾研究会事務局
- 杉並区立郷土博物館
- 世田谷文学館
- せたがや文化財団
- 全国文学館協議会
- 仙台文学館
- 川内まごころ文学館
- 高山市生涯学習課
- 遅筆堂文庫
- 調布市武者小路実篤記念館
- 壺井栄文学館
- 東京都江戸東京博物館
- 藤村記念館
- 東北大学史料館
- 東北大学総合学術博物館
- 徳島県立文学書道館

- 豊島区立郷土資料館
- 中原中也記念館
- 日本近代文学館
- 日本現代詩歌文学館
- 俳人協会
- 俳人協会青森県支部
- 八戸市博物館
- 八戸市美術館
- 原阿佐緒記念館
- 姫路文学館
- 弘前市立郷土文学館
- 福井県ふるさと文学館
- 福岡市文学館
- 文京区立森鷗外記念館
- 文京ふるさと歴史館
- 北海道立文学館
- 前橋文学館
- 松山市立子規記念博物館
- 三浦綾子記念文学館
- 三鷹市山本有三記念館
- 南相馬市埴谷・鳥尾記念文学資料館
- 宮柁二記念館
- 棟方志功記念館
- 室生犀星記念館
- 盛岡てがみ館
- 山梨県立文学館
- 吉川英治国民文化振興会
- 吉村昭記念文学館

館務日誌 平成30年

エクステンド常設展示「映画監督・川島雄三」

12月7日～5月27日

1月6日 野辺地高校(3名)見学

1月10日 RABラジオ取材

1月12日 青森テレビ取材

2月10日、12日 朝日新聞社取材

2月15日 陸奥新報社取材

2月21日 東奥日報社取材

2月24日 『本の装い』展」開催(～5月20日)

2月25日 青森放送取材

2月27日 青森ケーブルテレビ取材

3月1日 全国文学館協議会共同展示「震災と秋田雨雀」『骸骨の舞跳』」開催(～3月31日)

伊藤英俊氏(秋田雨雀記念館館長) 来館、青森朝日放送取材

3月4日 第16回青森県近代文学館川柳大会開催(91名)

青森放送、朝日新聞社取材

3月7日 青森朝日放送、東奥日報社取材

3月8日 NHK取材

3月12日 青森テレビ取材

3月16日 読売新聞社取材

3月18日 朝日新聞社取材

3月23日 坂巻靖之氏(シチズン史料室室長)、乾哲弥氏(東京美術代表取締役社長) 来館、東奥日報社取材

4月4日 NHK青森放送局取材

5月13日 日曜講座 講師：武水(参加者25名)

6月1日 エクステンド常設展示「北畠八穂」開催(～11月28日)

東奥日報社取材

6月5日 青森県近代文学館文学資料調査員会議

6月9日 大館市立栗盛記念図書館後援会(30名)見学

名)見学

6月13日 読売新聞社取材

6月26日 高木晶子氏(高木彬光長女) 来館

7月4日 図書委員研究大会(55名)見学

7月6日 東奥日報社取材

7月13日 青森中央短期大学(15名)見学

7月14日 「特別展 平成の青森文学」開催(～9月24日)

(テープカット)野沢省悟氏・吉田徳壽氏・世良啓氏・米田省三氏・藤田晴央氏・山田勝規館長)

7月19日 東奥日報社、NHK青森放送局、読売新聞社、陸奥新報社、青森県庁観光企画課取材

7月20日 東奥日報社取材

7月21日 藤里町三世代交流館(26名)見学

7月22日 第1回文学講座 朗読・青森明の星高校放送部、講演・川上健一氏(参加者68名)

7月27日 北海道・北東北生涯学習センター研修交流会(10名)見学

7月29日 成田市子氏(成田千空夫人)ご家族来館

7月31日 読売新聞社取材

8月4日 東奥日報社取材

8月14日 NHK青森放送局取材

8月16日 青森中央短期大学職場体験

8月19日 第2回文学講座 出演：井上諭一氏、世良啓氏(参加者58名)

8月21日 青森中央短期大学・青森大学職場体験、東奥日報社取材

8月25日 青森テレビ取材

8月27日 デーリー東北新聞社取材

9月4日 シニアカレッジ(8名)見学

9月5日 青森商業高校職場体験

9月6日 青森中央高校職場体験

9月8日 弘前南高校(26名)見学

9月10日 エルワークス取材

9月14日 文学館評議委員会

9月15日 北畠信三郎氏(北畠八穂甥)来館

9月16日 日曜講座 講師：伊藤(参加者30名)

9月22日 小山田久氏(十和田市長)来館

9月24日 藤田晴央氏来館

10月5日 東奥日報社取材

10月13日 高総文芸芸部門吟行(60名)見学

10月15日 荻原勝利氏(鳴海要吉孫)ご夫妻来館

10月17日 高森美由紀氏来館、青森テレビ、東奥日報社取材

10月19日 陸奥新報社取材

10月24日 朝日新聞社取材

10月25日 青森放送取材

10月27日 「太宰治没後70年」秘蔵資料大公開」開催(～1月14日)

金木太宰会(30名)見学、青森朝日放送取材

10月29日 NHK青森放送局取材

出前講座(弘前中央高校図書館教養講座・武水)27名

10月30日 朝日新聞社取材

11月3日 河北新報社取材

11月15日 読売新聞社取材

出前講座(三八地区親子ふれあい読書アドバイザー講座・武水)50名

11月18日 日曜講座 講師：竹浪(参加者31名)

11月21日 東奥日報音読教室(23名)見学、東奥日報社取材

11月24日 NEX(T)8名)見学

12月1日 高橋弘希氏来館

12月3日 陸奥新報社取材

12月6日 エクステンド常設展示「追悼 長部日出雄」開催(～5月26日)

青森放送、東奥日報社取材、青森中央高校(8名)見学

12月7日 毎日新聞社取材

12月9日 青森テレビ取材

12月10日 森義真氏(石川啄木記念館館長)来館

12月12日 読売新聞社取材

12月13日 出前講座(青森市中央寿大学・伊藤)52名

12月16日 出前講座(八戸ブックセンター「アカデミック・トーク」・竹浪)19名

12月18日 読売新聞社取材

12月24日 青森朝日放送取材



特別展 平成の青森文学 初日

青森県近代文学館報 第三十六号

発行日 平成三十一年三月十五日

編集発行 青森県近代文学館(青森県立図書館内)

〒030-0184 青森市荒川字藤戸一九七

電話 〇一七-七三九-一五七五

http://www.plib.pref.aomori.jp/viewer/info.html?id=30